

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	横 嶋 敬 行
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学教授） 山崎 勝之 副主査：（岡山大学教授） 寺澤 孝文 委 員：（鳴門教育大学教授） 田村 隆宏 委 員：（鳴門教育大学教授） 川上 綾子 委 員：（鳴門教育大学准教授） 小倉 正義
3. 論文題目	児童期における自律的セルフ・エスティームに関する研究 －測定法の開発および教育の効果評価への適用－
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座 横 嶋 敬 行 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成30年1月21日（日） 13時30分～14時15分 場所：鳴門教育大学 人文棟6階 A3会議室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本論文は、以下に示す、4部、全16章から構成されている。</p> <p>第Ⅰ部 セルフ・エスティームの研究と教育の動向ならびに本研究の目的</p> <p>第1章 セルフ・エスティーム研究の起こり</p> <p>第2章 セルフ・エスティームの適応的側面と不適応的側面の概念</p> <p>第3章 自律的セルフ・エスティームの測定法</p> <p>第4章 自律的セルフ・エスティームを高める教育プログラム</p> <p>第5章 本研究全体の目的と意義</p> <p>第Ⅱ部 自律的セルフ・エスティームの教育方法および測定法に関する研究</p> <p>第6章 小学校3年生を対象とした「自己信頼心（自信）の育成」プログラムの効果 －学校現場における適用可能性および教育効果の検討－（研究1）</p> <p>第7章 児童用 Rosenberg セルフ・エスティーム質問紙の作成 －信頼性ならびに児童ノミネート法による妥当性の検討－（研究2）</p>

第8章 児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストの作成（1）
－信頼性ならびに児童ノミネート法と RSES-C を用いた妥当性の検討－（研究3）

第9章 児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストの作成（2）
－高低得点児童に対する担任教師の児童評定を用いた妥当性の再検討－（研究4）

第Ⅲ部 児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストを用いた教育プログラムの効果評価と学校教育での活用に関する研究

第10章 小学校4年生を対象とした「自己信頼心（自信）の育成」プログラムの効果
－自律的および他律的セルフ・エスティームへの教育効果の検討－（研究5）

第11章 学校教育における児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストの使用に関する検討
－課題順序カウンターバランスの削除可能性の検討－（研究6）

第12章 紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストの多人数標準参照データ
－実施と採点の手順の紹介，そして標準参照データの提示を中心に－（研究7）

第Ⅳ部 本研究のまとめとセルフ・エスティーム研究の展望

第13章 総合考察

第14章 自律的および他律的セルフ・エスティームに関する本研究の課題と展望

第15章 自律的セルフ・エスティームを高める教育への視座

第16章 要約ならびに結論

概要は以下の通りである。

第Ⅰ部では、これまでのセルフ・エスティームに関する研究および教育の動向についてまとめられている。第1章は、過去のセルフ・エスティーム研究の潮流が扱われており、その効用を支持および否定する両研究をレビューする中で、セルフ・エスティームの概念を適応的側面と不適応的側面に弁別する主張が展開されているとまとめられている。第2章では適応的側面と不適応的側面を弁別的に扱う先行研究の概念をまとめるとともに、第3章では山崎ら（2017）のセルフ・エスティームの概念に依拠しながら、適応的側面である自律的セルフ・エスティームを非意識レベルで測定するための方法論について論じている。また、第4章になると、セルフ・エスティームの育成教育に視点が向けられる中で、自律的セルフ・エスティームを高める可能性を持つ予防教育「自己信頼心（自信）の育成」プログラムに関する説明と現状の課題がまとめられている。そして、第5章では、これまでの論理が総括され、研究の意義や目的が提示されている。

第Ⅱ部では、自律的セルフ・エスティームの教育方法と測定法に関する研究が行われている。ここでは、研究1（第6章）で「自己信頼心（自信）の育成」プログラムの学校現場への適用可能性が検討され、次章からセルフ・エスティームに関する測定法の開発が行われている。研究2（第7章）では、Rosenberg のセルフ・エスティーム尺度の児童版（RSES-C）を作成し、信頼

性と妥当性が検討されている。妥当性に関しては、担任教員による児童ノミネート法（他者評定法）が用いられており、またその観点としては、RSES が適応的側面と不適応的側面を混在して測定しているという見解を踏まえた妥当性の検討が行われている。研究3（第8章）と研究4（第9章）では、紙筆版の潜在連合テストを用いた児童用の自律的セルフ・エスティームの測定法（SE-IAT-C）の開発を行い、信頼性と妥当性が検討されている。ここでは、非意識の心的特性が本人も無自覚な行動特徴に現れやすいという先行研究の知見を踏まえて、担任教員によるSE-IAT-C 得点の高低群の行動特徴の評定（不安、攻撃性、自律性）から妥当性の検討が行われている。

第Ⅲ部では、作成した尺度を用いた「自己信頼心（自信）の育成」プログラムの効果検証や、SE-IAT-C の学校現場での活用に関する研究がまとめられている。研究5（第10章）では、RSES-C と SE-IAT-C の教育前後の変化が対比的に検討されており、RSES-C が無変化、SE-IAT-C の得点が上昇した結果を受け、自律的セルフ・エスティームに焦点化した教育の可能性について論じられている。研究6（第11章）では、SE-IAT-C の課題である冊子作成や採点に時間がかかるというデメリットを低減し、学校現場で簡易に使用するための方法として、カウンターバランスを削除した実施方法の検討が行われている。研究7（第12章）では、SE-IAT-C の実施および採点の手順に関する詳細な情報や、1000人規模のデータを用いた多人数の標準参照データが提示されている。

第Ⅳ部では、研究の総合考察、課題ならびに展望についてまとめられている。総合考察（第13章）では、人の意識および非意識の機能に関する理論とともに、RSES-C および SE-IAT-C が測定するセルフ・エスティームに関する解釈が論じられている。そして、自律的セルフ・エスティームを高める教育方法や、学校現場での SE-IAT-C を用いた自律的セルフ・エスティームのアセスメントの必要性ならびにその方法に関する考察が行われている。課題と展望は、第14章と第15章でまとめられている。第14章では、主に測定法および基礎研究に関する課題と展望がまとめられている。そこでは、作成された SE-IAT-C の課題と展望や、適応的側面と不適応的側面を弁別的に扱うセルフ・エスティーム研究の現状の課題や展望が示されている。第15章では、自律的セルフ・エスティームの教育に関する課題と展望について、新たな「自律的セルフ・エスティームの育成」プログラムの理論（山崎ら、2018）に関する言及や、プログラムを学校現場でより簡易に実施するための改善点、プログラムの効果を高めるための日常的な教育方法に関する視座などが提示されている。最後に、第16章は論文の要約ならびに結論がまとめられている。

2. 審査経過

セルフ・エスティームに関して、歴史的変遷を含めて内外の文献を精査し、そこから概念、測定、そして教育による育成上の問題点を精緻に導出している。健康と適応に真に貢献する自律的セルフ・エスティームという新規な概念の確立を受け、その測定法、教育方法、効果評価にかかわる研究目的の導出、研究実施と結果の分析、そして考察へと、いずれの段階も周到かつ論理的で、精度の高い実証的研究を展開している。

なかでも、このセルフ・エスティームの新規概念について、非意識での潜在的な測定法を信頼性と妥当性高く開発した点、とりわけ妥当性の検証の方法とその結果の独創性と周到さは注目に値する。測定法の実施ならびに妥当性検証において失敗を繰り返し、その後完成に至った測定法開発の整然としたプロセスは特筆される。また、その測定法を実際の教育効果評価に適用し、これまで頻繁に使用されてきた質問紙による結果と比較させた上での効果評価は、実施された教育方法の有効性ととも、この領域における従来の教育効果評価の在り方と結果に疑義を投げかける実証的な価値をもつ。この一連の研究により、学校教育に適用できる概念、測定法、教育法が揃い、応用性の高い研究成果となった。

今後の発展としては、①教育効果の検討にあたり、統制群を設定し、フォローアップ評価まで含めること、②学校での新規な概念、測定法、教育方法の普及にあたり、詳細で実効性の高いプランを練ること、そして、③潜在連合テストの特性としての特徴を明らかにすること、④教育方法を改善し、発展させること、などが示唆された。

こうして、極めて緻密に研究は展開され、実証性と独創性の高さをもった研究により、実際の学校教育にすぐに適用できる貴重な知見が提起され、この点において教育実践や社会に大きく貢献するものと判断された。

3. 審査報告

以上により、本審査委員会は 横嶋敬行 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。